

生きるお手伝い

有田由希



2015年秋、京都で暮らす祖父母の元へ介護のお手伝いをするためやって来ました。孫です。こんにちは。

1、難病とたたかう祖母

「おばあちゃんはな、若い時分、『地球を蹴って歩いてはる』と言われるような人なあ」
 そう言って笑う祖父は、今年で介護6年目。四

六時中祖母のことを考えています。食事中も散歩のときも寝ているときも……。

祖母は、パーキンソン病の一種「大脳皮質基底核変性症」という難病で、車いすとオムツは必需品。言語中枢の破壊のためにおうむ返ししかできません。2014年12月に脳幹梗塞になって入院してからは、おうむ返しでの会話もほとんど無くなり、食事も「胃ろう」と口の両方から摂るよう

になりました。

2、食事と「胃ろう」

食事はまず白湯、またはお茶を直接胃に入れていきます。その後、口からの食事になります。体力や誤嚥のことを考え、だいたい30分ほどで終わらせるようにします。量を食べさせたいからと言って急がせたり、無理に口に入れたりするのではなく、ゆっくりと祖母のリズムに合わせて、飲み込むまでに時間がかかるようであれば少しだけ手伝うようにします。

当たり前のことですが、祖母は喋れなくても意思や感情を持っています。観察していると、表情、息づかい、視線、口の動かし方、力の入れ方など様々なところに祖母の意思と感情を汲み取るヒントがあることに気が付きました。飲み込めないものがあるときや、食べたいものとは違うものが口に運ばれるようなときには、スプーンを近付けても口を開こうとしません。お正月に祖母の好きなヨーグルトと蟹味噌をあげていると、ヨーグルトだとあまり開けなかった口を、蟹味噌のときにはすんなり開け、目も大きく輝いて嚙下がとても早いことには驚きました。